

会報



有田史談会

事務局

佐賀県西松浦郡有田町上幸平 1-8-5

TEL : 0955-42-2466

URL: <http://arita-sidankai.sub.jp/>

E-mail : info@arita-sidankai.sub.jp

＜創刊号特集＞

- ・発刊によせて
- ・有田史談会でさらに学びたい
- ・史談会に寄せて
- ・有田のアイデアマンを探す
- ・庶民の生活の歴史を探して
- ・歴史を学び伝えたい
- ・陶祖李参平碑について
- ・第1回視察研修旅行(長崎)

有田史談会スタート!



平成28年4月2日、まるいしレストランにて発足を開催、「有田史談会」は大橋康二名誉会長を筆頭に、尾崎葉子顧問、松下久子顧問を含め会員14名でスタートすることとなった。有田史談会は有田の歴史を中心に学びながら、新たな視点で歴史を見つめ直し、調査発表の場を作っていくという活動を進める予定だ。今後は、大橋康二名誉会長による講演会なども計画中で、会員以外の一般の方々にも参加して頂き、共感の輪を広げていきたい。本年は有田焼創業四百年の節目でもあり、各々が目標を持ち、楽しみながら次世代に繋がる活動を目指す新たなスタートにしたい。

発刊によせて

会長 西山 峰次

この度会員の皆様方のご理解と名誉会長をお引き受け頂きました大橋先生、また顧問をお引き受け頂きました尾崎先生、長崎の松下先生のご協力を持ちまして、この四月に有田史談会を発足出来ましたことは、たいへん嬉しく思っております。会長を引き受けましたが、その任の重さに改めて身の引き締まる思いが致します。日本で最初に焼かれた磁器の町の史談会として、その歴史的意義の深さや、これまで多くの先人達が語り伝えて来た事などを良き手本として、関係機関のご協力を得ながら、新たな歴史的探求に努めてまいりたいと考えております。

私は、昭和62年より始めました渡来朝鮮陶工の出身地調査を、文禄・慶長の役に於ける鍋島軍の行動範囲を中心にして、韓国内の50ヶ所以上にも及ぶ古窯址を学芸員の力を借りながら調査してまいりましたが、今だに連房階段式の古窯を発見出来ずしております。磁器焼成の技術は確かに朝鮮陶工に依って伝えられたと思っておりますが、連房式の登り窯の築炉の技術は

何処から伝わったのか？朝鮮か中国か？渡来人の中に中国人が居たのか？と疑問は膨らむばかりであります。一年通った語学を生かしこれからも玄界灘を越え、かの国へ渡り手掛かりを求めつもりです。

会員の皆様と今後も研鑽を重ね、楽しい史談会にしていきたいと考えております。みなさまこれからよろしくお願い致します。

有田史談会でさらに学びたい

伊良皆尚子

日本磁器誕生「有田焼創業四百年」の年、有田町では様々なプロジェクトが、熱き深い思いを持った人々によって実行されています。この年に有田史談会が発足し、その仲間に参加出来た事をととても嬉しく思います。

私の幼年期は戦後間もなく、大人達は無口でガムシヤラに働いていました。当時は、この町の深さや凄さを知る事もなく、都会に憧れ三十数年を経て、この町に戻ってきました。東京や海外に居た時、出身地を聞かれる度に「有田です」と答えると、有田を知らない人は殆どいませんでした。大半の人は、有田という地名と、有田焼が素晴らしく高価であるという事を知っています。しかし、佐賀県に有田があることや、佐賀県はどこにあるのかを知っている人は少ないのです。そんな時、有田や有田焼の知名度の高さを知り、有田町の出身であることに、誇りを強く感じました。

日頃から、花柄の醤油注しや十草模様の和皿にショートケーキ等、私の父がデザインした有田焼を惜しみなく「おもてなし」に使っている私を見て、友人は羨ましがりました。有田に生まれ育ってなければ、この様な「おもてなし」をすることは出来なかったことでしょう。

有田は、優秀な技術を持った方や有識者の方が沢山存在する特長のある素晴らしい町です。有田の豊かな文化と四百年にわたる偉大で奥深い伝統芸術の歴史を改めて認識し大切に伝承するには、有田の子供達をはじめ町民が今まで以上に関心を持ち、これらの事実を知り、学ぶ機会を提供していく義務があると信じます。町の誰しもが有田を誇りに思い、同じ情報のもとに有田史談会が中心となり、有田でしか出来ない教育、学習の輪が広がることを願っています。史談会では、今まで知らなかった素晴らしい有田の全てを、さらに学びたいと思っています。



史談会に寄せて

有田町歴史民俗資料館
館長 尾崎葉子

平成 21 年 5 月、花王コミュニティミュージアム・プログラム助成を受けて、「150 年前の有田皿山歩こう隊」の活動を、史談会の前身であるアリタ・ガイド・クラブと有田町歴史民俗資料館の協働で行うことになり、平成 23 年までの 3 年間、活動を続けました。

この活動は、佐賀県立図書館に所蔵されている「安政六年 松浦郡有田郷図」という絵図を元に、この 150 年の間に変わった所、変わらない所を実際に歩くことで“町の宝”を確認するものでした。3 年間の活動では多くの有田町民の方が参加され、改めてふるさと有田に対する思いや凄さを実感していただいた活動でもありましたし、これらの活動を通じて、多くの町民の皆様が資料館に出入りしていただき、より身近に館を活用いただけるようになったと思います。

そうした中、平成 25 年に資料館や文化財課の活動に人的な応援をしようという有難い申し出のもと、ありたれきみん応援団が発足しました。これは歩こう隊を発展的に解消し、次の段階にステップアップするということで住民の皆様が自発的に結成されたものです。結成後は文化財課の発掘調査報告会や、資料館の子どもたちを対象とした模型作り教室や歴史の川ざらい、また毎年秋に開催する企画展などに対する支援をいただいております。このほか毎月れきみん学習会を開催していますが、応援団の皆様にとっても、有田の歴史がより身近に感じていただけるよう、さらに当館や職員を活用していただければと思います。

これからも史談会を中心としたれきみん応援団の皆様、人手も予算も厳しい当館・当課に手を差し伸べていただきますようお願い申し上げます。



興味の泉が尽きせぬ事を願う

山口信行

史談会発足にあたり、ひと言述べさせていただきます。とは申しましても格別に述べるものは何も持ち合わせてはおりません。

若い頃は別として、冬支度を始める頃には、或いは誰しもそうかも知れませんが、自らが生きている又は生きて来た土地をもう少し根を張って見つめてみようじゃないか、という思いがあります。また、いったいどれほど自らの土地の事を知っているだろうか、その道の先達の方々の知恵をお借りし、自らの周りをこれまで少しばかり見つめて来ました。その一つが、この会の前身『歩こう会』じゃなかったかと私は思います。

その中で知った断片的な事柄、興味ある事柄を、ちょっとばかり歴史的に掘り下げて行けたら……。そのような視点で今回この会に参加させていただきました。興味の泉が尽きせぬ事を願っています。

史談会の発足に寄せて

長崎県文化振興課学芸員
有田史談会顧問 松下久子

有田史談会の発足おめでとうございます。4 月 2 日におこなわれた発足式に、私も参加させていただきました。この日は、晴天に満開の桜が美しい春爛漫といったお天気のもと、様々なバックグラウンドを持つ個性豊かなメンバーの皆様がそろい、印象深い一日でした。

今後は、各人が取り組んだ研究成果を積極的に発表していかれる予定とのこと。それぞれのユニークな視点で有田の奥深い歴史や文化を探り、有田の魅力を発信して行かれることと思います。西山会長をはじめとする会員の皆様のご活躍と、有田史談会のご発展を心より祈念申し上げます。

有田のアイデアマンを探す

馬場正明

昨年の歴史民俗資料館のテーマ展「戦争と有田」で陶貨が紹介された。その陶貨製造のキッカケが、陶磁器製釦（ぼたん）の生産にあったということで陶製ボタンも紹介された。

早速パソコンで特許検索を行って、どんな釦を創作したか見る。J-P l a d P a t (特許情報プラットフォーム) を立ち上げ、戦前の釦の材料に係る特許分類をインプットすると 270 件がヒット。このうち大部分が金属ほかガラス、竹、木、プラスチック。なお、釦の材料としては貝などが多く使用されていた。陶磁器製の釦は実用新案が 17 件であった。

最も初期の陶磁器製釦は飾り釦で、大正時代に万古焼の海蔵出身の今村政太郎が陶磁器製彫刻釦を考案している。有田の人が考案した釦は、以下の人々が陶磁器製釦の取り付けに種々の工夫をしている。

庄村吉郎 赤絵区の陶芸家 二代目晩香 彫刻絵模様を付けた陶磁器製釦の裏面に金属板を接着したカフス釦を考案（実公昭 8-5869）

なお、松本源次著「有田陶業側面史」によると、吉郎は帯止め騒動のころ商工会の委員として奔走した

久保寿吉 岩谷河内 2304 番地 彫刻絵模様を付けた陶磁器製釦の裏面に取り付け用金属を固定した考案 2 案（実公昭 9-8655 実公昭 9-8656）

成富龍馬 上幸平 1174 番地 彫刻絵模様を付けた陶磁器製釦の裏面に“又”の字状の針金を固定した考案（実公昭 10-5968）翠壺

いずれも昭和 10 年頃に考えられている。有田においては当時帯止め特許の騒動で、特許の意識が高まっていたのではないかと想像される。

引き続き、有田の過去のアイデアマンを戦前の特許・実用新案 50 万件の中から探していきたい。

庶民の生活の歴史を探して

栗山慎悟

小学校の頃から本に親しんできて、二十歳頃吉川英治の三国史を読み歴史に興味を持つようになった。そして有田にも歴史があることを知った。磁器発祥の地という榮譽を持つ有田町の歴史は、豊臣秀吉が起こした文禄・慶長の役に始まる焼き物一辺倒の歴史であるが、その内容は多岐にわたる。

有田という山間部に古伊万里・柿右衛門様式・鍋島と異なる三つの図案が登場し、その芸術性は高く評価され、日用食器としての利用度も高く、その影響は国内はもとより海外にまで及び研究も進んでいる。

しかし、それらのすべては庶民が生活の糧を得るための作業から生まれたものであり、歴史となったものである。

私の興味は歴史を作った庶民の生活にある。地名の由来、方言、伝説、伝承、信仰、道路脇や山中などの石碑の由来など、知る人語る人は少なくなり消えつつある。この消えつつある庶民の生活を探し、このたび発足した史談会の会報を通じて残していきたい。

創刊号によせて

中島 忠

有田史談の会報創刊おめでとうございます。史談会の活動が盛んになり、地域の活性化に少しでも寄与できるようになりたいものです。頑張りましょう。



何事にも興味津々

中村貞光

有田に帰省して早12年経ったが、帰省したばかりの頃は、有田で生まれ育っているのに有田のことを殆ど知らなかった。丁度その頃、有田を学習する機会に恵まれ、参加したことが現在に繋がっている。

これまで多くの方々と出会い、知らなかった有田の歴史を数多く学ぶことが出来たが、最近では、覚えることより忘れることの方がより多くなっているように思えてならない。何はともあれ、何かに興味を持つことが一番の老化防止に役立つはずだと確信して、自分なりの努力はしているが、体力や思考力は年々下降線を辿っていて衰えは顕著なのが目立つ。

しかしながら、会員の学習意欲だけはまだ衰えておらず、年々意気盛んである。日々の努力を怠らず継続すれば、老人力も捨てたものではないと、先輩達の氣力を頂き新たな気持ちで真摯に学ぼうと思っている。会員として未だテーマが定まっていらないが、事務局のお世話役をまずは無事に努めたいと思っている。

歴史を学び伝えたい

坂井勝也

「長い交流の歴史（日本と韓国）の中には、友好の時代も侵略という不幸な時代もありました。私たちはその歴史を正しく認識して、お互いの文化と習慣を尊重しなければなりません。そして率直に語り合い、より良い友好関係を築いていこうではありませんか。」これは佐賀県立名護屋城博物館の展示コーナー解説の一部です。韓国の国際交流員Kさんは、「過去に謝罪してほしいのではありません。日本人たちに事実を知ってほしい。忘れてほしくないのです。どちらか一方に偏らず、事実を互いにきちんと認識し、次の世代に伝える。それが本当の国際交流につながるのです。」と言っておられます。—西日本新聞 2000年7月27日

有田には陶祖李参平の顕彰碑が陶山神社の頂上にあり、毎週沢山の韓国の旅行者が訪れております。陶祖李参平の顕彰碑は韓国との国際親善に大いに貢献しているものと思います。できれば、一回きりの来訪でなく、また有田を訪れたいという印象を持って帰ってほしいと思います。そのためには何か自分達に出来ることはないかと思案しています。

歴史教育の目的は、「自分の国の歴史に誇りを持つこと」「同じ過ちを起こさないこと」と教えられました。現状を見るとクイズや受験に強い人は育っておりますが、本当の歴史教育はされていないのではないかと思います。「言うは易く、行ふは難し」「お前は口ばかり」とまた言われそうですが、幸いなことに4月より有田史談会が発足しますので、この機会に先輩の方の教えを受けながら、有田の歴史を勉強していきたいと思っております。今後ともよろしくお願い致します。

陶祖李参平碑

陶祖李参平碑は、大正6年(1917年)有田焼創業300年を記念し建立された。毎年5月4日には「陶祖祭」が行われる。碑の高さは約6メートル。



我カ陶祖李参平氏ハ朝鮮忠清道金江ノ人ナリ文禄元年豊公征韓ノ役ニ方リ我カ軍ノ為ノ盡瘁スル所以カラサリシカハ慶長元年藩祖直茂公凱旋ノ際橋ヘテ歸化セシノ参謀多久安順氏ニ属セシム金江ノ人ナル

ヲ以テ金ヶ江姓ヲ胃ス初メ小城郡多久村ニ住シ其ノ習熟スル所ノ陶業ヲ創シモ良土ヲ獲ス元和年間松浦郡有田郷乱橋ニ来リテ陶業ニ従ヒ遂ニ泉山ニ於テ最良ノ磁石ヲ発見シ上白川ニ移住シ初メテ純白ナル磁器ヲ製出ス此レ實ニ本邦ニ於ケル白磁器製造ノ嚆矢ナル爾来其ノ製法ヲ継承シテ以テ今日ノ盛ヲ見ルニ至レリ願フニ李氏ハ我カ有田ノ陶祖タルノミナラズ本邦窯業界ノ大恩人ナリ苟モ斯業ニ従事シテ其ノ餘澤ニ浴スル者孰カ其ノ遺功ヲ欽仰セラランヤ

従六位 千住武次郎 撰
(教育長・佐賀県立図書館長)

大正六年十月

従三位 鍋島直映 書
(鍋島家十二代当主侯爵 貴族院議員)

有田焼の祖李参平公は朝鮮忠清道金江の人であり、文禄元年（1592）豊臣秀吉公が朝鮮出兵の時、鍋島軍に一生懸命協力したと思われる。その縁で慶長元年（1595）佐賀藩祖鍋島直茂公が帰国する時、参謀多久安順軍に属して日本へ来て帰化した。金江の出身なので金ヶ江姓を名乗った。初めは小城郡多久村に住み、手馴れたやきものの窯を起こしたが、良い土に恵まれず、元和（1616）年間、松浦郡有田郷三代橋に来て窯を起し、ついに泉山において磁石を発見した。それから上白川に移り住み初めて純白な磁器を作り出した。実に日本における白磁製造のことはじめである。そのうちこの製法は伝々引き継がれて今日の繁栄を見るにいたったのである。願うに李参平公は我々有田の陶祖のみならず、日本窯業界の大恩人である。いやしくも陶磁器事業にたずさわりの、この先人の残した恩恵を受けるものは、この先人が残した功績を敬い慕わなければならない。

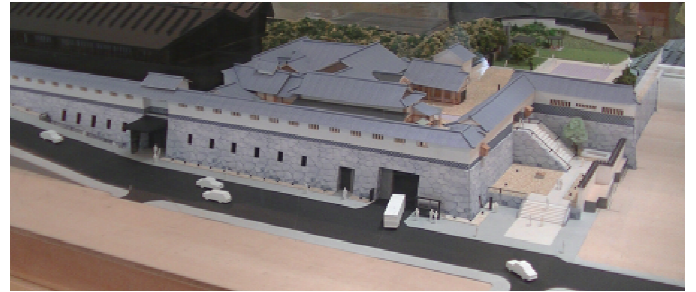
第1回視察研修旅行



(1820年ごろの出島を再現された15分の1の模型)

6月8日、第1回視察研修旅行（長崎）を7名の会員が参加し、天候に恵まれ実施した。この日は、レンタカーの会社が予約を忘れて？しまうという、仰天のアクシデントに見舞われたが、そのことでレンタカー料金が無料になるという幸運が舞い降りるラッキーデーになった。

午前8時半の出発はやや遅れたが、一番目の研修先「長崎歴史文化博物館」（長崎奉行所跡）は定刻からスタートすることが出来た。研修は2班に分かれ、事前に予約しておいたボランティア・ガイドの案内で館内を隈なく見学、うち一班は30分も延長して頂く？嬉しい研修に、予定を変更するハプニングになった。



昼食後、有田焼とは縁の深い「出島」を見学、整備中の建物が多く期待はずれの見学になったが、有田焼が輸出された往時の様子を思い描くことが出来た。「長崎歴史民俗資料館」では昭和時代の生活用品の展示があり当時を懐かしんだ。隣接する「原爆資料館」では、昭和20年8月9日の原爆投下で一変した惨状にふれ心が痛んだ。最後に「平和記念公園」で記念写真を撮り帰路についた。予定より30分遅れの午後5時半に無事有田へ戻り、この日の研修を終了した。



編集後記

有田史談会が発足して2か月が経ち、ようやく創刊号の目途がついたものの編集作業に手間取り、予定より1か月遅れの発行になってしまった。もともと事務作業を得意としていた訳ではないのだが、パソコンを購入して一年後、自身の中に眠っていた好奇心が覚醒、それ以来日々楽しみながら学習し現在に至っている。何事も諦めずに継続することは意味があるのだと自身に言い聞かせながら飽きずに挑戦を続けているが、少しずつ進化しつつ老化防止に役立っている。女房曰く「ほんとかよ〜？」